アジア地域研究所　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21 世紀海域学の創成」プロジェクト

本学アジア地域研究所は東南アジアを中心とする外邦図ならびに水路図を数多く所蔵している。これらの地図は1940 年代に日本陸軍が当時の旧植民地宗主国が作成した地図を編纂したり、新たに作成したりしたものである。2013 年度から3 年間にわたり、アジア地域研究所は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21 世紀海域学の創成」プロジェクトを進め、外邦図については、その目録を完成させた。今年度は外邦図の活用を進めるとともに、水路図について整理を行う予定にしている。これらの作業に先立ち、それぞれの研究の第一人者である小林氏、今井氏に、成立の過程と現時点での整理状況、ならびにその活用の方法などについて、ご講演いただく。

外邦図と水路図
－成立の過程と活用の可能性－

2014 年 5 月 17 日（土）13：30 ～ 17：30
立教大学池袋キャンパス 12 号館地下第 1・2 会議室

●小林 茂（こばやし しげる）氏
1948 年名古屋市生まれ、1974 年京都大学文学研究科博士課程中退、2003 年博士（文学）（京都大学）、2013 年大阪大学名誉教授、現在大阪観光大学教授。外邦図の研究を率先して進め、著書に『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域―「外邦図」へのアプローチ―』大阪大学出版会 2009 年（編者）（日本地理学会優秀賞受賞、2010 年）『外邦図―帝国日本のアジア地図―』中央公論新社（中公新書 2119）2011 年（人文地理学会賞［一般図書部門］受賞 2012 年）などがある。

●今井 健三（いまい けんぞう）氏
1942 年生まれ、1967 年 3 月日本大学文理学部地理学科卒業、海上保安庁海洋情報部（旧水路部）に勤務。海図作製及び海図作製技術者教育に従事。海上保安庁退職後、財団法人日本水路協会に勤務。水路技術者養成等事業に従事。現在は一般財団法人日本水路協会技術アドバイザー。著書に「日本海図誕生に果たした英国測量艦の技術支援―「鹽飽諸島實測原圖」の作製をめぐって―」2011 年 3 月　大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室外邦図研究グループ　外邦図研究ニューズレター 8 号、「英国海図を模範として発展した日本海図―明治初期の日・英海図の表現法を比較して―」2013 年日本地図学会機関誌『地図』51 巻 4 号などがある。

別紙１４

立教大学文学部公開講演会

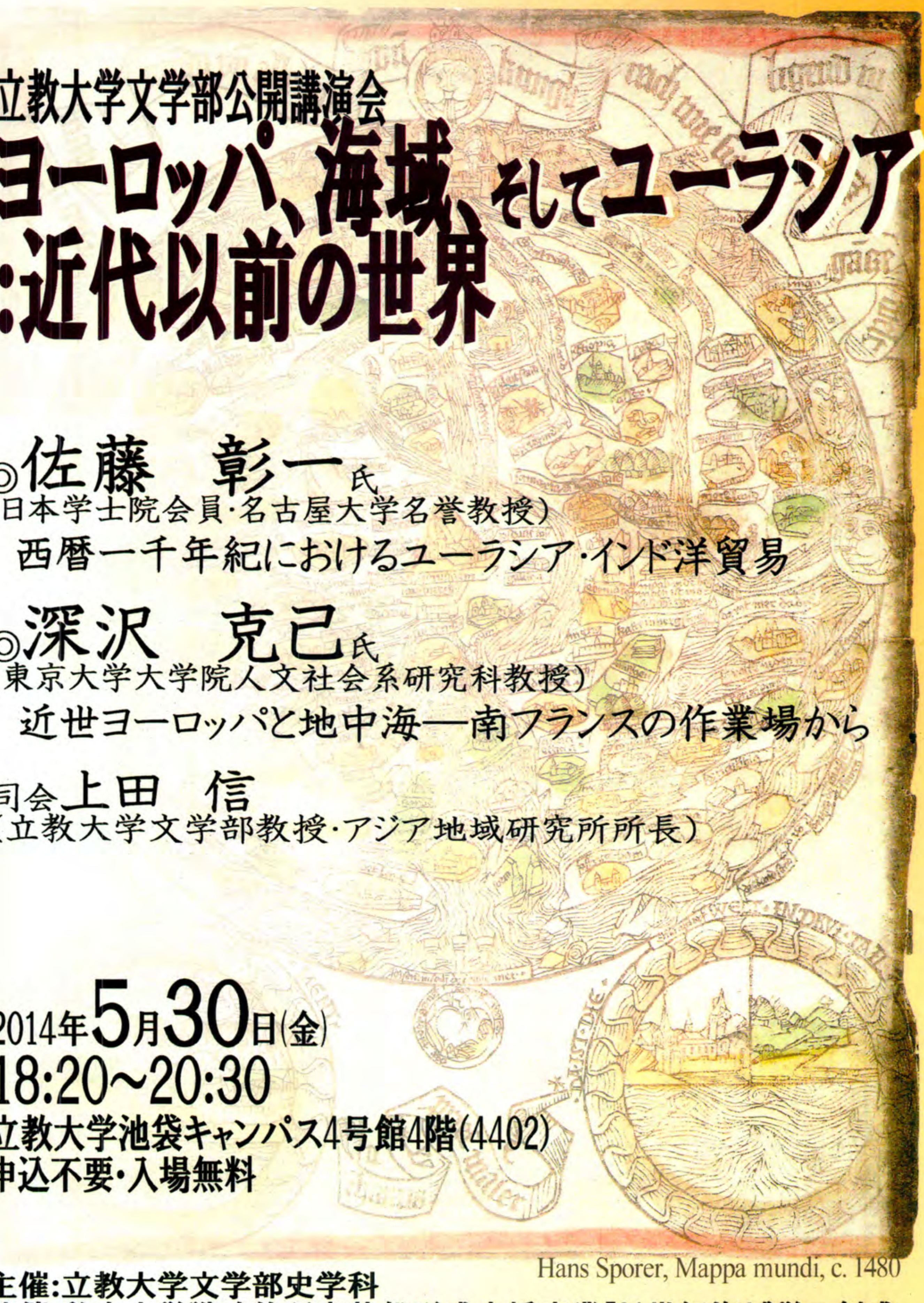
ヨーロッパ、海域、そしてユーラシア:近代以前の世界

◎佐藤　彰一氏
（日本学士院会員・名古屋大学名誉教授）
西暦一千年紀におけるユーラシア・インド洋貿易

◎深沢　克己氏
（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
近世ヨーロッパと地中海―南フランスの作業場から

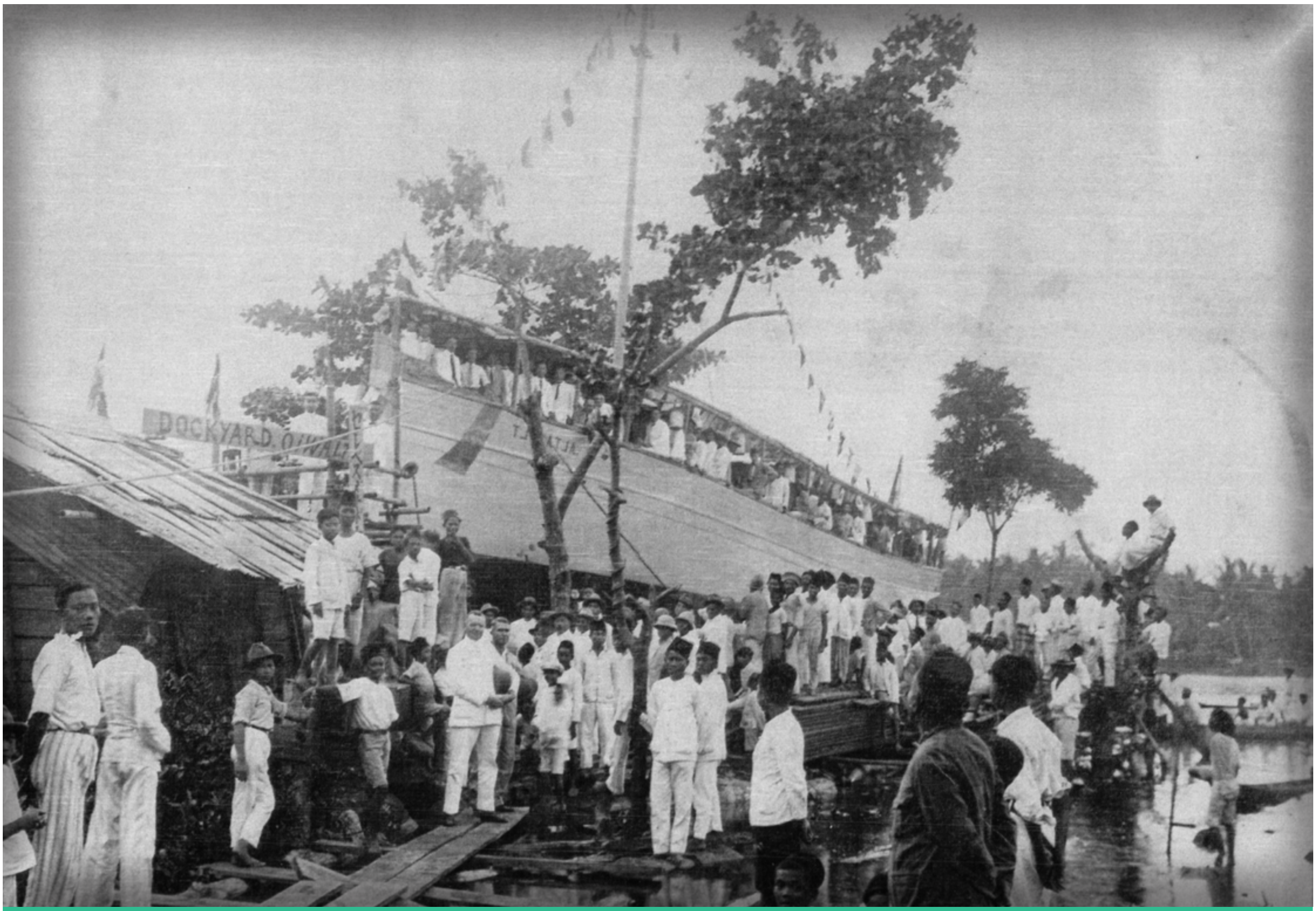
司会上田　信
（立教大学文学部教授・アジア地域研究所所長）

2014年5月30日(金)
18:20～20:30
立教大学池袋キャンパス4号館4階(4402)
申込不要・入場無料



Hans Sporer, Mappa mundi, c. 1480

主催:立教大学文学部史学科
共催:私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21世紀海域学の創成」
問合せ先:学部事務1課(文学部担当)TEL:03-3985-2479
小澤　実(文学部准教授):m-ozawa@rikkyo.ac.jp



立教大学アジア地域研究所 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21 世紀海域学の創成」プロジェクト 公開シンポジウム

南洋と沖縄

かつて日本の委任統治領となった南洋の文化を考えるさいに、沖縄との人と文化の交流を考察することが不可欠である。海域学の視点から、漁業と芸能の2つの側面から考察する。

日時：2014年　6月21日（土）13：00～17：00

場所：立教大学池袋キャンパス　8号館　8202教室　＜申込・参加費 不要＞

13:00 ～	＊開会挨拶＊	**上田 信**（本学文学部教授　アジア地域研究所 所長）
13:05 ～	＊基調報告＊	「南洋とは何か」 **豊田 由貴夫**（本学観光学部教授　アジア地域研究所 副所長）
13:25 ～	＊事例報告＊	「かつお節から見た沖縄と南洋の出会い」 **藤林 泰**（元埼玉大学教授）
休憩（10 分）		
14:45 ～	＊事例報告＊	「もうひとつの沖縄音楽の足跡―南洋における音楽交流」 **小西 潤子**（沖縄芸術大学教授 ）
15:55 ～	＊対　　談＊	「沖縄芝居の南洋巡業」 **瀬名波 孝子**（沖縄芝居演者）**伊良波 さゆき**（沖縄俳優協会会員） **細井 尚子**（本学異文化コミュニケーション学部教授　アジア地域研究所 所員）
16:55 ～	＊閉会挨拶＊	**細井 尚子**（本学異文化コミュニケーション学部教授　アジア地域研究所 所員）

立教大学アジア地域研究所「21 世紀海域学の創成」プロジェクト室
TEL/FAX：03-3985-4492（月・木）　E-mail：kaiikigaku@rikkyo.ac.jp

立教大学アジア地域研究所　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21 世紀海域学の創成」プロジェクト 公開講演会

沖縄芝居に見る大衆娯楽の「近代」
—瀬名波孝子の芝居人生—

瀬名波孝子氏が若い頃から携わってきた沖縄の芝居の変遷を、ご自身の経験を基に実演を交えながら解説していただく。このなかで、特に南洋帰りの洋舞指導者との交流などについて取り上げる。

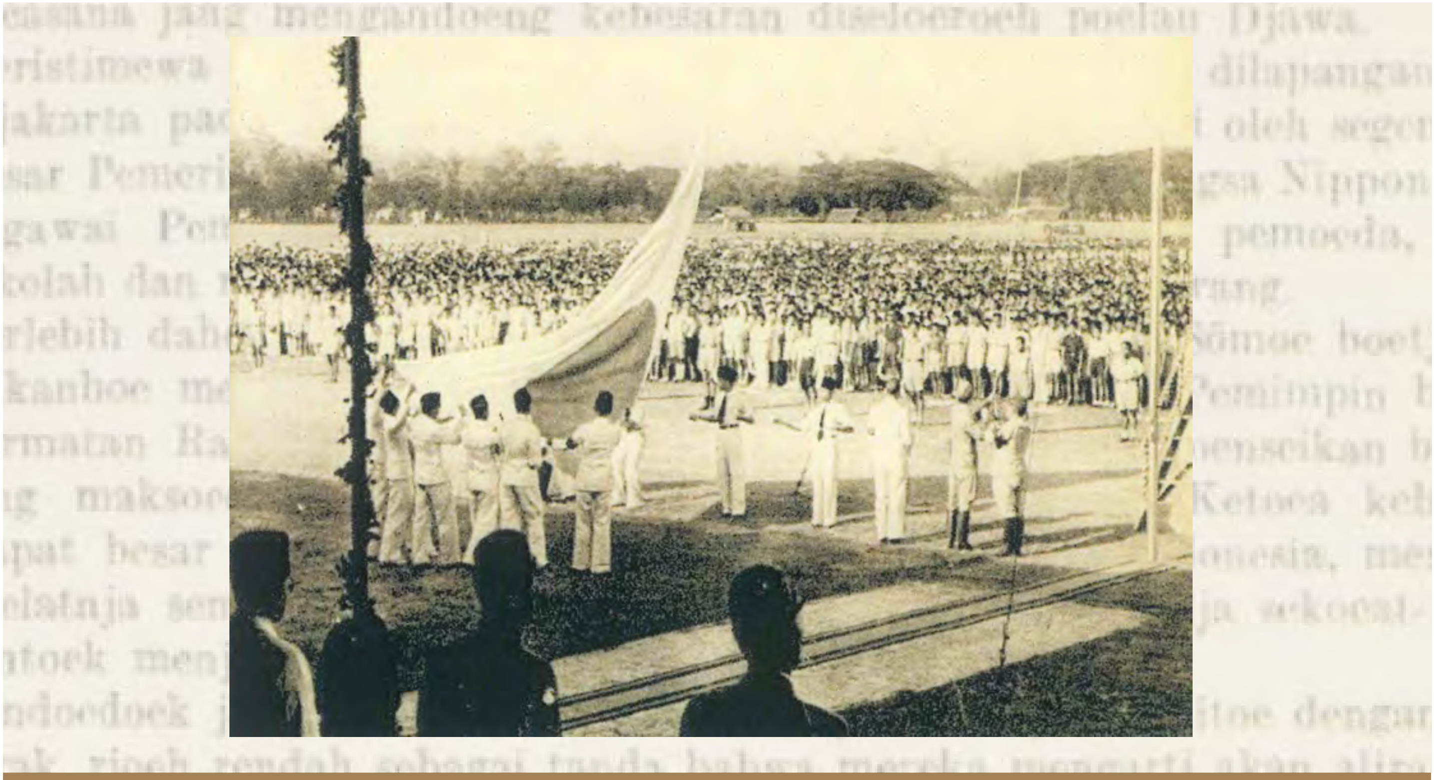
日時：2014 年 6 月 22 日（日）10:00 ～ 11:40
場所：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 3 階多目的ホール

瀬名波 孝子（せなみ たかこ）氏
1933 年生まれ。3 歳から琉球舞踊を習い、9 歳で沖縄芝居の劇団に入る。以降、松劇団、梅劇団、沖縄座など主要な劇団を経て、みつわ坐を設立。沖縄芝居の衰退期に劇団経営の経験を得るなど、一演者としてのみならず、沖縄芝居の興行にも詳しい。1984 年、第 18 回沖縄タイムス芸術選賞「演劇の部」奨励賞受賞。1999 年、沖縄県指定無形文化財琉球歌劇保持者。2005 年に第 39 回沖縄タイムス芸術選賞「演劇の部」大賞受賞。

伊良波 さゆき（いらは さゆき）氏
沖縄芝居演者･沖縄民謡歌手･三線奏者､沖縄芝居の舞台のほか､映画「友の碑ー白梅学徒の沖縄戦」(2003 年）出演。祖父は戦前に伊良波一座を結成して南洋を巡業し、琉球歌劇の名作を遺した伊良波尹吉氏。

＜申込・参加費　不要＞

立教大学アジア地域研究所「21 世紀海域学の創成」プロジェクト室
TEL/FAX：03-3985-4492（月・木）　E-mail：kaiikigaku@rikkyo.ac.jp



立教大学アジア地域研究所 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「21 世紀海域学の創成」プロジェクト 公開シンポジウム

日本占領下の南洋

21 世紀海域学の創成を目指すとき、アジア太平洋戦争の期間に日本が南洋（東南アジア島嶼部ならびに太平洋諸島）を支配した事実を正確に理解する必要がある。日本占領期のマラヤを研究しているクラトスカ氏ならびに、日本占領期の東南アジアの情勢を、政治・社会・文化・教育という多角的な視点から検討している講師に登壇いただき、総合的に検討する。

日時：2014年 11月 16日（日）13：30～17：00

場所：立教大学池袋キャンパス　太刀川記念館3階多目的ホール

＜申込・参加費 不要＞　※同時通訳あり

13:30 ～	＊開会挨拶＊	上田 信（本学文学部教授　アジア地域研究所 所長）
13:35 ～	＊報告＊	**「日本占領下のマラヤ」** KRATOSKA, Paul（クラトスカ、ポール）氏 (国立シンガポール大学教授、本学招聘研究員）
14:15 ～	＊報告＊	**「日本のインドネシア占領を考える」** 後藤 乾一氏（早稲田大学名誉教授）
14:55 ～		休憩（10 分）
15:05 ～	＊報告＊	**「日本占領下の東南アジアにおける日本語教育―マラヤ、北ボルネオを中心に―」** 松永 典子氏 (九州大学教授)
15:45 ～	＊報告＊	**「日本占領下インドネシアで語られた「大東亜共栄圏文化」の理念** **― 日刊紙「アシア・ラヤ」上の日本徴用文化人と現地作家の論説を中心に―」** 姫本 由美子（アジア地域研究所特任研究員）
16:30 ～	＊ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ＊	進行：豊田 三佳（本学観光学部准教授　アジア地域研究所 所員）
16:55 ～	＊閉会挨拶＊	弘末 雅士（本学文学部教授　アジア地域研究所 所員）

立教大学アジア地域研究所「21 世紀海域学の創成」プロジェクト室
TEL/FAX：03-3985-4492（月・木）　E-mail：kaiikigaku@rikkyo.ac.jp

別紙１８(１)

立教大学アジア地域研究所

なじまあ

親しみ深きアジア
―Accessible Asia―

特集 アジアにおけるキリスト教

ベトナム人司祭チャン・ロックとファットジェム大聖堂―ベトナムのキリスト教と木造教会堂建築―／山田幸正
台湾と中国のカトリック教会のいま／山岡三治
パプアニューギニアのキリスト教／豊田由貴夫
日本ホーリネス教会における進化論受容と戦責告白問題／ゾンターク・ミラ

05

No.05 2015

倉田明子　トゥルグト・サネル　大橋健一　倉田徹　豊田三佳　山口元樹
クリスチャン・ダニエルス　高原明生　福島康博　山下王世　権赫麟　高藤洋子

別紙１８(２)

なじまぁ

No.05 2015 contents

親しみ深きアジア

—Accessible Asia—

特集／アジアにおけるキリスト教

ベトナム人司祭チャン・ロックとファットジエム大聖堂ーベトナムのキリスト教と木造教会堂建築ー／山田幸正 ····· 4

台湾と中国のカトリック教会のいま／山岡三治 ······ 6

パプアニューギニアのキリスト教／豊田由貴夫 ······ 8

日本ホーリネス教会における進化論受容と戦責告白問題／ゾンターク・ミラ ······ 10

コラム

ギュツラフと海域アジア／倉田明子 ······ 12

論考

後期オスマン建築における西洋認識／トゥルグト・サネル ······ 13

外邦図コレクション

外邦図をめぐるフランス極東学院（EFEO）との学術協力／大橋健一 ······ 16

教壇から

アジアを、政治を、もっと身近に感じようーアジア政治論ー／倉田徹 ······ 18

持続可能な観光開発をめざしてーアジア太平洋観光論ー／豊田三佳 ······ 19

アジ研的本棚 -Book review-

弘末雅士編『越境者の世界史―奴隷・移住者・混血者』／山口元樹 ······ 20

Masatoshi A. Konish 著『Hāth-Kāghaz』／クリスチャン・ダニエルス ······ 21

研究員紹介

中国の発展、そして成長した中国と世界ー分配の政治経済学と新興大国の国際関係／高原明生 ······ 22

日本と中東・東南アジアを結ぶハラール・ビジネス研究　新しい「おもてなし」と顧客満足／福島康博 ······ 23

フィールドから

信州岡谷とキリスト教ー製糸工女の記憶とともにー／山下王世 ······ 24

アジ研的・レストラン探訪

インド料理屋スリヤ／権赫麟 ······ 27

編集後記／大橋健一　山下王世 ······ 28

世界のおじさん・おばさん／高藤洋子 ······ 28

●「なじまぁ」とは

身近なアジア、親しみあるアジア、行きやすいアジア。「親しみ深い」というコンセプトを一言でいうと「なじみ」。「アジアになじむ」という意味をこめて、日本語で「なじまぁ」というタイトルを思いつきました。NAJIMI に ASIA をかけています。「〜まぁ」のいい方で「アジアになじもうよ」という勧誘の意も表しています。

表紙写真／ファットジエム大聖堂正面ファサード／撮影：山田幸正

ファットジエム大聖堂（1891 年献堂）の正面ファサードは奥行 8.8m におよぶ堂々とした石造建造物で、五連トンネルヴォールトの通廊を基壇とし、軒反りを強調した２層の楼閣が載り、中国建築を意識した特異な意匠が採用されている。

右ページ写真／池に立つ聖像とファットジエム大聖堂鐘楼門／撮影：山田幸正

大聖堂に至る軸線上には人口池が設けられ、十字に両腕を広げたキリスト像がその中の島に立つ。三連トンネルヴォールトの門の上には、聖堂正面と同様の２層楼閣が聳え、そのなかに鐘が収められている。この鐘楼門と大聖堂の間の中庭にはチャン・ロック神父の墓が設けられている。

外邦図
コレクション
⑤

外邦図をめぐる フランス極東学院（EFEO）との学術協力

大橋健一

展覧会「Đà Lạt- Et la carte créa la ville…」

2013年12月9日から15日、ベトナム中部の高原都市ダラットにおいて「Đà Lạt- Et la carte créa la ville …」と題する展覧会が開催された。この展覧会は、仏越国交樹立40周年記念行事「ベトナムにおけるフランス年2013・フランスにおけるベトナム年2014」の一環として、またダラット120周年の記念行事の一環として、フランス極東学院、ベトナム国立公文書館、ラムドン省博物館によって企画、開催されたものである。

同展覧会は、フランスによる植民地体制下で行われた1880年代のベトナム中部高原への探検踏査、そしてダラットが「発見」された1893年以降、それぞれの時代に作成された地図を中心とする史料を通してダラットの都市発展の歴史的過程をたどりつつ、ダラットの都市文化遺産の保存と都市開発の将来へ向けた課題を提示するという内容となっており、ベトナムはもとより旧宗主国のフランス、さらにはスイス、そして日本からも関連史料が出展された。

周知の通り、日本は第二次大戦中に「仏印進駐」という形で仏領インドシナに関与し、その過程で仏領インドシナ各地の外邦図も作成された。ただし、同地域の外邦図のほとんどは、現地のフランス植民地機関が作成した既存のフランス語版地図を接収した上で、主要地名や凡例を日本語に改めた日・仏語併記の地図という特徴をもっている。同展に出展された外邦図「DALAT（ダラト）十万分一佛領印度支那二百三號」もまた同様の特徴をもつものであった。

フランス植民地都市としてのダラット

ダラットは、ベトナム中部高原の標高約1500メートルに位置するいわゆるヒル・ステーションである。ヒル・ステーションとは、東南アジアからアフリカにかけて西洋の旧植民地の山間部に広く分布した避暑空間であり、また、植民地体制下における軍事・戦略上の重要性や健康、保健衛生、余暇などの諸機能を担った空間である。植民地の山中にありながらそこは非西洋における閉ざされた西洋的景観を形成しており、また、西洋的生活文化が再生産される場であった。イギリスは、インドを中心に多くのヒル・ステーションをその植民地に建設し、代表的なヒル・ステーションとしてシムラーやダージリンの名がすぐにあがるほどであるが、フランスもまたインドシナ支配の過程においていくつかのヒル・ステーションを建設したのであった。

ダラットは、1893年、フランスによるベトナムの植民地支配下に行われた探検踏査の過程で「発見」され、フランス植民地総督は、1899年にダラットにおけるヒル・ステーションの建設を決定した。さらに、1916年にはダラットの本格的な観光開発が決定され、またその後、フランス領インドシナ連邦の首都をこの地に建設する計画も立案された。これらの意味においてダラットは、ベトナムにおけるフランス植民地主義のひとつの結晶とも言いうる特殊な意味を付与された空間として成立した都市であったといえよう。

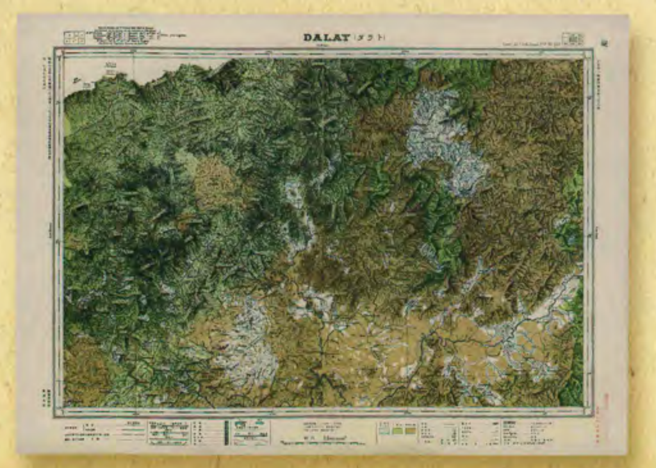


図1／展覧会「Đà Lạt-Et la carte créa la ville…」に出展された外邦図「DALAT（ダラト）十万分一佛領印度支那二百三號」（立教大学アジア地域研究所所蔵）

写真1／展覧会「Đà Lạt-Et la carte créa la ville…」会場でメディアからのインタビューに答える駐越フランス大使

写真2／ダラットの風景

脱植民地化後のベトナムにおいてもダラットのもつこのような特殊な意味は文脈を変えながらも持続し、今日に至っている。フランス植民地時代の町並みや建築物はもとより、植民地時代にフランスから持ち込まれた高原野菜や果物、ワインやコーヒーなどの生活文化、そして人々の間で共有されるこの都市のイメージに至るまで、ベトナムの中においてダラットは今日においてもなお「フランス」を強く喚起させる特殊な場所であり続けている。そして、これは現在のダラットで進む観光開発において極めて重要な資源ともなっている。

フランス極東学院（EFEO）からの協力依頼

さて、展覧会「Đà Lạt- Et la carte créa la ville …」に出展された外邦図「DALAT（ダラト）十万分一佛領印度支那二百三號」は、実は立教大学アジア地域研究所所蔵の外邦図コレクションの中から出展されたものであった。

協力依頼の発端は、フランス極東学院ホーチミン市事務所でのPascal Bourdeaux代表と筆者との何気ない会話にあった。筆者は、上述したようなダラットという都市のもつ特殊な意味に関心をもつようになり、15年ほど前より断続的にダラットに関する調査研究を続けてきたが、2年ほど前にダラットへの調査に向かう途上に訪問したホーチミン市で、開設されて間もないフランス極東学院ホーチミン市事務所へ立ち寄り、Bourdeaux代表とお互いの研究上の関心についていろいろと語り合う中で、代表は筆者がダラットの調査研究をしていることに強い関心を示され、筆者は当時企画段階にあったダラットに関する展覧会の話を偶然にも聞くことになった。その後、ホーチミン市を訪れる機会があるごとにBourdeaux代表を訪ねるようになったが、何回目かに彼を訪問した際にダラットに関する展覧会について相談を持ちかけられた。それは、日本の進駐期に関して何か興味深い史料や企画はないだろうかというものであった。当時、アジア地域研究所では上田所長を代表者として「21世紀海域学の創成」プロジェクトが新たに発足し、研究所所蔵の外邦図の整理とデジタルアーカイブ化がまさに進行し始めたところであった。このことをBourdeaux代表に話すと、初めて聞く外邦図というものの存在に驚かれると同時に、地図を中心にダラットの都市発展を跡づけるという企画の性格上、外邦図はこの展覧会にまさにうってつけの史料であり、ぜひとも展示史料に加えたいとのことであった。こうして筆者が仲介をする形で上田所長からもフランス極東学院への学術協力として外邦図を提供することにご理解をいただき、アジア地域研究所所蔵の外邦図はダラットで展示されることになった。

外邦図の国際共同利用へ向けて

今回のフランス極東学院との学術協力は、個人的な研究上のつながりと幾重もの偶然が重なった結果実現したが、今後は外邦図というものの存在を国際的に発信することも含めて、外邦図の国際的な共同利用へ向けた体制の整備が求められるだろう。今回の協力は、その重要性を確認するよい機会であったといえよう。

大橋　健一（おおはし・けんいち）

立教大学観光学部交流文化学科教授
立教大学社会学部卒業。同大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。香港大学アジア研究センター、兵庫教育大学などを経て現職。フランス国立科学研究センター都市人類学研究所、ベトナム国家大学ハノイ社会人文科学大学などの客員研究員を歴任。主著に『都市エスニシティの社会学』『香港社会の人類学』『アジア都市文化学の可能性』『移動するアジア』（以上共著）など。

別紙１８(３)